戦後初期宮古の文芸活動Ⅱ

文芸誌（紙）等の盛衰

博物館協議委員　仲宗根　將二

はじめに
一、戦後初の雑誌『文化創造』
二、ガリ版刷り一枚の『文芸旬刊』
三、文化連盟と総合雑誌『宮古文化』
四、創刊号だけの『文芸』
五、本村武史の時代小説素描
おわりに

はじめに

一九三一（昭和六）年に始まった「十五年戦争」は、一九四五年八月、連合国の「ポツダム宣言」受諾で、日本は降伏した。奄美以南の島々は米軍の全面占領下におかれ、沖縄県は消滅する。地上戦はなかったとはいえ、米英軍の連日の猛爆で焦土と化した宮古に、米軍政が施行されたのは、同年十二月八日である。以後、一九五二年四月、「琉球政府」が発足するまでの六年有余、人びとは米軍政の許容範囲内ではあったが、宮古支庁→宮古民政府→宮古群島政府（公選）を中心に、「自立」を模索していた。敗戦で、価値体系は崩壊し、極度のモノ不足のなかにあっても、先人の歴史に学び、「強力なジャーナリズムの形成」「文化立島」を標榜して活動する若ものたちがいた。その拠り所の一つが『文化創造』『文芸旬刊』『宮古文化』『文芸』…などの小紙誌である。

本稿は、これら小紙誌などをとおして、改めて「戦後初期宮古の文芸活動」について跡づけたものである。

一、戦後初の雑誌『文化創造』

戦後宮古で初めて出た雑誌は、平良好児の主宰する『文化創造』である。一九四六年三月五日付の創刊号は、A四判ていど、八ページ建ての薄っぺらな小冊子。それでも活字に飢えていた当時の人びとは、争うように買い求めたと伝えられている。巻頭の横書き題字の上には、〃文化雑誌〃と冠してあるので、純然たる文芸誌ではないが、内容は文芸誌といってもよいような配慮がされている。主宰者の趣向を示すものであろう。

一面は三段組で、上段は大きな横書きの題字、中段は「次に来る出発点（創刊の辞に代へて）」と題して、縦書きの二十二字詰め、二十六行の巻頭言が記されている。下段は目次である。一面のこのスタイルは最終刊とみなされる五号まで変らない。二面以降は一面と異なり三段組であったり、十一字詰め六段組であったりで、統一されていない。活字も大方不足していたのであろう。周知の熟語も仮名表記が多い。

創刊号巻頭言は冒頭「民衆の文化低迷！知識層の知識貧困、之等を培ふ為の目論見である。インテリのはんりょたり得るは勿論

民衆文化の巨火たるべき意図の下に全幅の知的労働がささげらるべく、好児空拳にして『文化創造』を世に贈る」と、創刊の意図を鮮明にしている。ついで押さえ難い激情と沈思の交錯する青春特有の苦悩を吐露した上で、さらに「僕は宮古に於ける虚偽と混迷の世相の中に自分を静かに見つめる為に沈黙を求めて来た。それは丁度白紙の上にペンを握っての休息であった。それは次に来る出発点に立つ息づまる様な感激の発作であった。おゝ！ペン先が震へる」と記している。戦火で廃墟と化した郷土宮古の、すさまじいばかりの精神の荒廃、混沌たる世相に、果敢に挑もうとする論者の、孤高の意気込みが伝わってくるようだ。十代では社会主義理論に接して卒業を目前にして師範学校退学を余儀なくされられ、日華事変で大陸を転戦し、宮古島防衛戦で敗戦を迎えた好児三十四歳の創刊の辞である。

二面トップには「泥棒は誰か？腐敗政治を衝く」を執筆、「民衆を雑草の如く」みなして、「食物は路上の石ころのやうに不自由なく、巨財をかくまって遊興と安逸の中」にある政治家を糾弾している。「人物小評」では、宮古製材業の創始者川満明教が紹介されている。以上はすべて主宰者の執筆である。このほか随感「青木の死」大木たかし、宮古秘史「南進貿易のさきがけ密牙古人」下地かほる、時事直言「民権荒廃の巷に立ちて」イケイ・雅、「彼奴らの自己批判」平耕作、アメリカ科学秘話「ＤＤＴの威力」嵩原恵典、「本能と智能との関係」上野陽一ら。八面が「読者文芸」で、詩をイケイ・雅、城三重夫、山下磯夫、短歌を芳田杉二郎、朝島一木らが書いている。

編集後記では、「ペン先が震へる」ほど内燃の焔は私をぢっとしておれなくするのである。書籍のみを友に寝食を忘れた如く今、私の文化運動への意欲は徒に埋火であってはならないと思ふほど明るみへ出発するのだ。私は空拳を以て立った。紙不足と経済苦の只中に…、江湖の士来りて語れかし、地下に燃えたぎる埋火の同志！来りて與せよ！と記し、最後に『文化創造』を皆の舞台として活用せられよ、と呼びかけている。奥付には定価一部一円の記載とともに、「毎月三回五の日発行」と明記している。

第二号は予定通り三月十五日に発行された。巻頭言は「過去へのたたかい」と題して、若者の前進を阻もうとする人びとを糾弾した上で、「文化を創造するもの、それは過去への激しいたたかいによってなされよう。われわれの努力は玩迷な連中には一つのユトピア（空想）に見えるものだ。私は又、かかる廃墟の番人たちからはユトピアストと見られることを甘受しよう」と記している。『文化創造』の発行に対し、何らかの障害、妨害が生じていたのであろうか。

二面は日本が連合国に対して受け入れた第二次大戦降伏の条件である「ポツダム宣言」全文を掲載している。三面では「車輪とネジ」と題し、副見出しで〃政治も文化もすべて民衆の為に捧げらるべし〃とうたいあげている。四面以降連載物で埋め、八面は詩を諸里哲、竹田とし、短歌を牧富士夫、西山鉄夫、下地潮鳴が寄稿している。

第三号も三月二十五日の定期発行である。巻頭言は「遺憾の士」と題し、宮古郡政あるいは平良町政への批判であろうか、野にある「遺憾の士」を求めず、情実人事をすすめるものに新時代を担当する能力なしと断じている。また二面には「カイロ宣言」

全文を掲載し、副見出しに〝アメリカは自由を尊重する、その四つの自由とは何か？〟を記している。本号からは「師道昂揚論」饒平名浩太郎、創作「春の街道」平良好児の連載が始まり、詩は砂辺寄子、徳村静可が寄稿している。

第四号は二か月遅れて六月二十五日、十二ページ建発行である。巻頭言「復刊のことば」は、「文化創造は二ヶ月発刊不能の余儀なきに至らしめられた」と書きだし、「一切のねたみや経済的圧迫によって文化の前衛が打ちひしがれる事は絶対にない」と断言したものの、さらに二か月遅延した第五号でもって、停刊を余儀なくしている。

四号では創刊以来の上野陽一、下地かほるの連載物が完結、新たに郷土史に題材をとった創作「牛蠅物語」宮川耕一、コント「土曜日」砂川一村の連載が始まっている。詩はイケイ・雅、砂川明、短歌を下地しげるらが寄稿している。第五号は八月二十五日に発行、コント「火取虫」本村武史の連載も始まるが、続刊なく、他の連載物とともにストップしてしまったようだ。巻頭言「文学青年」は「文学青年とはかつて侮蔑的揶揄をもって呼ばれた時代があった」と記した上で、今そのように呼ぶ政治家気どりを哀れむ、「文学青年といわれることを甘受しよう」と記し、編集後記で「本号の遅れたことを読者諸兄にお詫びする。雑誌発行に就いて種々の困難性もあることを御諒察願へれば幸甚である」と記している。

結局『文化創造』は五号雑誌に終ったようだ。資金面の枯渇ばかりでなく、何らかの妨害のあったことをうかがわせる幕切れである。はじめ一円であった定価は二号から三円、四号から五円にアップ。発行所も三号までは西里一六一、四号からは下里七七四であり、各面にわたって紆余曲折のあったことをうかがわせている。ともあれ戦後宮古で初めて発行された〝文化雑誌〟としての栄誉は、将来ともに消えることはないだろう。

二、ガリ版刷り一枚の「文芸旬刊」

雑誌「文化創造」が一九四六（昭和二十一）年八月二十五日発行の第五号で停刊したあと、戦後宮古における二番めの文芸誌として登場したのはガリ版刷り「文芸旬刊」である。同年十二月一日宮古文芸協会によって創刊されている。B四判ザラ紙一枚のウラオモテわずかに二頁に過ぎないものを文芸誌とよぶには、あるいは適切を欠くのかもしれない。今ならばせいぜい一枚切りのリーフレットに過ぎないからである。強いてならミニ「文芸紙」とでもいうべきであろうが、衣食住はもとよりあらゆる物資に事欠き、確かな情報も読みものも皆無に近いあのころ、人びとはむさぼるようにして、廻し読みしていたという。重量感をもつ「文芸誌」としてうけ入れられていたのである。

三ミリ方眼原紙であろうか、創刊号は、十六文字、四十四行、七段組で、ぎっしり書きこまれている。全面文字でうめつくしても片面で四九二八字、両面では四百字詰原稿用紙のほゞ二十四枚分ということになろうか。最終刊の二六号までほゞ同様である。

創刊号は一面トップに「文芸人の使命ー創刊の辞に代へて」と題して本村武史が六五〇字ていど書いている。戦争と敗戦の混沌、それを招来した軍部と財閥の責任を追及するとともに、日本

人つまりは宮古人の「排他的感情、封建性、島国根性、原始的因習」と、現実主義は一時的現象ではないと批判し、そこから「文化人の進むべき方途をここに誤りなく思ひ出して文化島宮古建設の為、文学なんて生活の口実ではないと嘲笑する原始リアリズムと原始マンモニズムに新文化の名に於て闘争せんとする。この意味においてのみ本紙の創刊は祝福されるべきである」と宣言している。また二面最下段の「編集後記」では、「創刊号を世に問う。宮古に於ては始めてである故幾多の曲折があり、我等の期待はむしろ今後にある。我等は一つの運動を提示したに過ぎない。（中略）我等の思念は純文学研究の側、宮古文化建設の為あらゆる論説の粋を集めて強力なるジャーナリズム形成を願ふ」とうたいあげている。

作品では、詩に「さすらへる魂」平良恵一郎、「トメトの日」克山滋、「情熱」砂川行弘、「抱擁」黙人、「ヒポコンデリア」本村武史、短歌に「雑詠」石原昌秀、「帰郷せる日に詠める」平踏世、俳句に「菊外三題」平本魯秋、「朱欒抄(一)」浅野喜破痴、「秋の蝿」国仲穂水、その他に「演芸雑感」大原浩、「同人呈言」平踏世、魯秋、「同人の叫び」克山滋がそれぞれ十数行ていどの小文を記している。文芸小紙にふさわしく、平良彦一の「黎明の鐘ー祝辞に代へて」と題する三一行ばかりの詩も掲載されている。

文芸旬刊同人、同人規約、宮古文芸協会について、作品募集等も掲載され、二面最下段には「発行所　宮古文芸協会　（西里一四七）、発行者　本村武史、編集　文芸旬刊編集部」と記されている。文芸紙としての体載はみごとにととのえられており、全体本村のリーダーシップで創刊された感をうかがわせるものがある。西里一四七も当時の本村宅であり、今の北西里・エルム美容室の位置である。

ところで同人の多くはもはや故人が多いが、なかにはのちの「郷土文学」の平良好児、さらに今なお句作に精進する国仲穂水、武史の実弟隆俊の名もみえる。同人名と同人規約はつぎのとおりである。

※文芸旬刊同人（年令順）

荒野　静樹、大原　裕、平良　好児、新見　邦彦
藤村　彪、平本　魯秋、本村　武史、克山　滋
平良　健、国仲　穂水、平良恵一郎、下地　玄省
本村　隆俊、下地　豊光、浅野喜破痴

※同人規約

一、同人

1．文芸旬刊発刊に参画せる者
2．同人の推薦により同人会の承認を得たる者
3．常に優秀なる作品を発表し、同人会の推薦を経た者。
4．同人は文芸旬刊維持の責務を有す。
5．同人は維持費月五円を負担す。但し入会時二ヶ月分前納の事。
6．同人は同人会に参画す。同人会は月一回行ふ。
7．同人会は文芸旬刊の経費、編集及作品の相互研究を行ふ。

二、誌友

1．一般愛読者を以て誌友とす。
2．誌友の投稿は自由とす。
3．誌友は購読料月三円とす。

限られた小さなスペースにもかかわらず、作品募集のよびかけでは、「創作、詩、短歌、俳句、随筆、評論（社会、政治、経済、文化」）と全般にわたっている。創刊の辞、編集後記、同人規約等から、いかに同人諸士が戦火で焦土と化し、ひきつづく敗戦ですべてが荒廃したなかで、文芸人としての自覚を堅持し、我ら何をなすべきかの使命感に燃えていたか、を垣間見る思いがする。

こんな小さな紙面でも創刊を祝する広告が一段四行ていどずつでている。大見謝支店、先島ガゼット社、宮古郡医師会、宮古郡歯科医師会、平岡物療院の五件。大見謝支店は克山の生家である。

こうして第二号は十二月十日発行され、ひきつづき翌四七年九月二十日の二十六号まで、七月以外は着実に旬刊としての定期発行を重ねている。このときから最終号まで印刷人に瀬名波昇の名が記されている。専属で謄写印刷に従事していたのであろうか。

二号の一面トップには山内朝二が宮古文芸協会長の肩書きで「第二号発刊に際して」をよせている。「文学は作家の芸術的創造力の産物であると同時に時代文化現象の一つであり、流動して止まない郡民精神生活の現れでもある。いかなる時代の文芸も常にその時代の反映であり、いかなる時代にもその文化の中心となり根底となる思想がある。それが社会活動の中心となり、心棒となってその時代の文化を運転せしめる根本精神をなしている。宮古文芸協会表現の背後には現在の宮古の時代精神が横たはり、盛られてゐる」と記している。

文芸協会は顧問に下地敏之、亀川恵信、平良彦一、与儀達敏の四人を推戴、会員には文芸旬刊同人のほか多数が参加を希望しており、順次紹介していくつもりだ、と記している。同人と協会がどのようにかかわっているのか、この限りでは明らかでないが、奥付では「宮古文芸協会機関紙」「発行編集代表　本村武史」と、創刊号とは多少異なった表記になっている。

作品では、本村が掌編の創作「噂」を発表し、詩を平良賀計、克山滋、本村隆俊、短歌に石原昌秀、田崎邦男、俳句に平本魯秋、浅野喜破痴、国仲穂水らがよせている。宮古俳句会が毎月一回開かれることも予告している。初句会は十二月十六日、日曜日午後一時半から文芸協会で、季題「時雨」三句、横一寸、縦三寸の短冊に記し持参するようによびかけている。以後そのつどの例会案内が掲載されるようになる。この段階では文芸協会の所在地は明記されていないが、おそらく武史宅であろう。十一号にきて第五回句会は「宮古文芸協会（平良彦一宅）」となっている。

「メモ」なる欄に、「われらが挙兵に対し公論社より用紙一連の寄贈があった。茲に同人一同感謝する次第」というのがある。当時は一般新聞でさえロール紙の片面刷りや大学ノートをばらして使うなど、用紙の入手はきわめて困難をきわめていたようである。「文芸旬刊」の創刊、はたまた文芸協会の設立は、同人にとってまさに「挙兵」とよぶにふさわしいものがあったのであろう。公論社とは同年五月十五日弁護士下地敏之を委員長とする宮古民主党が創刊した機関誌「宮古公論」の発行元のようである。主筆は元平良町助役であり、民主党執行委員の下地徹である。

十二月二十一日発行の第三号には一面トップに、「随筆　学究生活」を医学博士の亀川恵信が執筆、六号まで連載している。作品は平本魯秋、国仲穂水、平踏世、田崎邦男ら常連のほか国仲寛

一「クリスマス雑詞」、山内朝隆「クリスマス・カロル」、詩に前川静己「友忘れ難く」、小町繁「或る夜」、辻文子「売笑婦」などがある。

年明けて一九四七（昭和二十二）年一月一日発行の四号は、一面トップに本村武史が「新春に題す」を書いている。「太平洋上の一孤島としてともすれば見捨てられがちであった吾々宮古人は今こそ自らの意志と力とを以て自らの教養を高め文化意識を高揚して世界の宮古島を建設しなければならない。（中略）吾人は宮古を愛するが故に更に更に文学を生活せんとするものである」と。ここでも文芸人としての自覚、使命をうながす提言になっている。藤川耕作の創作「章子」、垣花松風「其の後」が新たに登場、また宮高女短歌会の十二月歌会作品も紹介されている。

『編集手帖』によると、十二月二十五日には文芸協会は会長はじめ各顧問、同人全員、各新聞社代表が集って、「大いに己を語り、文学を語り、宮古を語る、言々句々宮古の現在を表現せんとする若き文芸人の意気をあげた」と記している。

新年号にふさわしく一面下段に二段抜きで懸賞募集の広告もかかげている。創作は四百字詰め原稿用紙一〇枚以内、詩一編、評論六枚以内、短歌五首以内、俳句三句以内、〆切一月十日、当選発表二月一日号紙上、選者編集部、「当選者ニハ薄謝ヲ呈ス」と明記している。しかし二月一日発行七号にはそれらしい気配はなく、応募者がなかったのか、それとも入選作がなかったのか、定かではない。ところで、同号には本村武史が「芸能協会発表の〃四島の主〃を見て」を発表している。日時の明記はないが、宮古史に材をとって全七幕、山田某、勝連某らが出演したことを伝えている。「芸能協会がかくの如き時世に生れ、そして雄々しく宮古文化開発へ奮起し第一回の発表にまで漕ぎつけ得た情熱に感謝すると共に芸能協会の将来と宮古演芸の進展を今後に大いに期待」すると結んでいる。おそらく芸能協会の誕生も、宮古人による宮古史を題材にした演劇も戦前戦後を通じてこのときが初めてのようである。芸能協会選「宮古口説」も紹介されている。

石原昌秀を中心に近く宮古短歌会が結成されること、初心者をふくむ多くの参加をよびかけるなども同号に掲載されている。佐久田繁の投稿「習作　少年の恋」も紹介されている。

二月二十日発行九号からは紙面が縦二センチ、横三センチていど小さくなっている。十三文字、三十八行、七段である。「編集手帖」は、「断腸の思ひで紙型を縮少する。然し何時かはまとまった雑誌へ飛躍したいと願う心にゆるみはない。会員、読者諸氏暫時の御了解を願いたい」と記している。紙の入手がいっそう困難になったのだろうか。反面、定期的な句会、歌会が開かれているせいか、常連外の発表者の顔ぶれが多彩になってきている。

四月二十日付一五号「編集手帖」には「色々都合があって発行が遅れがちで申し訳ない。早く元に戻すよう努力する」と記している。発行回数と日付は順調なので所定の月日よりは遅れていたのだろうか。また、同号一面トップには初めて宮古外の作品が二点掲載され、「編集手帖」は、「本土詩人の事を……そして詩人西川満氏の作品を鑑賞詩として掲載する」とでているだけで、小さな紙面であるはずなのに何故そうするのか理由は定かでない。その後二二、二三、二四、二六号と中央誌の転載らしいのがあいついでいる。

五月一日付発行一六号一面には本村武史の六行の短詩に、池村恒仁のスケッチが添えられている。紙上詩画展の感をなすもので、創刊以来初めてのことである。また、五月二十日付一七号には、ゲイル・ショルダン原作「かりそめの夫」を藤川耕作訳で掲載することを訳者の言葉とともに予告、次号から二〇号までの三回抄訳を連載している。

八月一日付二二号では「お詫びとお願い」で「編集子の個人的事情」で七月中は休刊したこと、購読料を月五円にアップしたことを伝えている。一一号までは奥付に「月三円」を表示、その後は表示のなかったものである。創刊以来「編集発行人」をつとめてきた本村武史が、八月十日付二三号では実弟隆俊に代っている。

こうして創刊以来ほゞ順調に定期刊行を堅持してきた「文芸旬刊」は、一九四七年九月二十日付二六号をもって停刊している。もっとも最終号に停刊のあいさつがあるわけではないので、紙面をみる限りでは続刊中の印象を与えている。この間の経緯について、中心的な役割を果たしてきた本村武史は後年、宮古民政府文教部社会課長の山内朝隆に「いつまでもガリ版刷りにしておくのは惜しい。印刷費は文教部で補助するので月刊の文芸誌にしたら……」といわれて同意したと語っている（『週刊宮古』一四二号、一九六四）。発展的に解消したということであろうか。

三、文化連盟と総合雑誌「宮古文化」

B四判ガリ刷りわずか一枚の裏表二ページとはいえ、旬刊で継続発行され、宮古文芸界に旋風を巻き起こした『文芸旬刊』は、一九四七年九月二十日付の二六号が一応の終刊号とみなされている。終刊の原因はとかく同人誌につきまといがちな創作意欲の欠除でも、資金源の枯渇でもない。多くの心ある人びとに支えられ、また、雑誌の継続発行に必要な用紙等の資材は、沖縄本島まで密航して入手するなど精力的に活動している。短歌会、俳句会も定期的に開かれて同人の結束はいよいよ堅く、創作意欲は大いに高まっていたとみなされるからである。

1、「文化宮古」の建設へ

むしろこうした同人の積極的な活動が、第二次世界大戦で焦土と化し、荒廃した人心を郷土の歴史や文化を掘り起こすことで再興しようと模索していた宮古民政府の受け入れるところとなったようだ。同年七月十一日の第五回宮古議会で、大要つぎのように発言した亀川恵信議員の提言も、『文芸旬刊』の活動を反映したものといえよう。

九番（亀川恵信）先づ文化部設置について。古来未曾有の厖大な追加予算を一瞥して宮古郡財政の膨大さに一驚を喫しますが、これほどの追加予算の内容にも不拘文化向上への施設が盛られてない事は甚だ遺憾な事と存じます。具志堅知事の常にモットーと致します宮古楽土建設は、宮古の文化向上なくしては如何に産業・経済が復興しても期待し難いのであって、私が文化運動の必要性を強調する所以も此処にあるのであります。即ち宮古文化運動の急速にして活発なる展開の必要を痛感いたします。而らば現在宮古にある文化運動の実情はと申せば芸

能協会、文芸協会、キリスト教会（宗教運動）、英語塾、オリオン研究所等ありますが、此等は単に民間の指導階級によって計画されていますが、決して満足なる効果は収めてないので、更に民政府として強力なる文化運動を推進して欲しいのであります。現在の文教部の機構ではその人的機構及び予算等の関係で活発なる文化運動は困難であります。沖縄本島では文化部があって、部厚文化シリーズを発行して思想の善導に努め生活改善、趣味の向上に努めているし、宮古よりも財的に劣っている八重山でさへも文化部が設立され、印刷部を設置して文化運動を促進しているし、八重山文化あり、子供新聞あり、芸能協会等があって文化運動を助成しつつあります。かく述べますれば自ら文化部設置の必要を痛感なされると思はれますが、沖縄文化部長の講演の如く沖縄本島では既に沖縄文化建設の目標を明瞭に認識して道義、良心の復興、科学知識の普及、能率増進、民主沖縄の実現等確実なる歩みを続けているのに、只宮古人が文化建設に関心を余り示さないのは甚だ遺憾の事と思う。人口八万に垂んとしているのに宮古の新聞社の発行部数が僅かに千部を越すに足らんとは宮古人の文化意識の低劣さを示すものであって、為政者は反省すべきだと思う。文化部でなくても暫定的文教部を拡充して教育行政面と文化行政面の二課制にして、二課長を置いたら良いと思う。さうして言論、芸術、宗教等の社会教育、文化施設の行政をなす必要がある。その為には文化助成費としての予算を充分とって活発に活動しなければ宮古楽土建設は夢であり、片輪であると思ふのであります（以下略）（「第五回宮古議会議事録」）。

これに対して、具志堅宗精知事は「文化事業については緩急がある。即ち今日は人の褌で仕事をやるといふ様な立場にある」と米軍の全面占領下、民政全般について宮古単独で対処せざるを得ない苦衷を吐露しつつ、「文化事業面では社会課の中に文化部といふものを設置して、文化、社会方面を担当してみっちりやって貰ふと思う。物心両面から来る楽土建設は郡民の和衷協力、一致団結して始めて成し得る事であり、今の調子では見事に実現性があると自分は確信している」と答弁している。また、宮古民政府の総務部長であり、米軍の指示で宮古議会の議長もつとめる与儀達敏も賛意を表明している。

2、宮古文化連盟を結成

宮古文芸協会とその機関紙『文芸旬刊』のじみだが、積極的な活動、宮古議会の動向をにらみながら、宮古民政府は全宮古を視野に入れた文化活動を推進するための母体として、宮古文化連盟を結成することになった。こうして初の〃文化を語る座談会〃が同年十月二十日午後二時から祥雲寺で開かれた。「行政面に於ける郷土建設の着々たる成功と相まって文化面に於ける建設も又並行推進されねばならぬ。文化は我々の生活を道義的にひき上げ香り高い豊かなものにし、且つ科学的にする。文化運動の展開こそ政治的諸問題、行政的諸施設に溌剌たる生気を与える」という趣旨のもとにである。初の文化座談会に出席したメンバーはつぎの面々のようである。

本村　武史、石原　昌秀、新里　博一、下地　健一
亀川　恵信、平良　好児、砂川　真美、本村　恵清

我如古恵寛、浦崎　栄人、國仲　寛一、岡本　格外
亀川　正東、豊見山恵永、友利　寛長、友利　秀一
勝連　盛金、藤村　彪、翁長小次郎、松本　武雄

座談会では、文化の意義、宮古の文化のあり方、アメリカ文化についてなど、様々な観点から話題が深められたようだが、出席者は一致して各種文化団体の連絡統合機関の設置を確認した。ついで十一月六日、二回目の座談会が開かれ、連絡統合機関の性格、範囲、組織について討議を深めた。宮古民政府は各界による座談会の進展に対応して本村玄典、豊見山恵永、仲嶺浩、我如古恵寛、下地利秋、石原昌秀ら六名を文化委員に任命している。さらに三回めの会合では正式に「宮古文化連盟」として会則等の検討にまで発展していった。

このような推移のもと、同年十一月二十九日午後二時から太平劇場に、代表百三十余人が出席して、宮古文化連盟が正式に発足した。委員長＝稲村賢敷、副委員長＝山内朝隆（社会課長）、監事＝下地明増・下地恵三らが選ばれた。また文化連盟は文芸、音楽、美術、舞踊、評論、演劇の六部が設けられ、各部の研究発表、芸術祭、機関誌の発行、文化功労者の顕彰等をその事業内容とした。事務局は宮古民政府文教部社会課内におかれた。機関誌『宮古文化』は明けて一九四八年一月創刊をメドに、本村武史（玄典）、平良恵仁、新里博一ら三人が編集部員となり、「文化面にふれて一般の教養を高める大衆雑誌」として位置づけられた。

『宮古文化』創刊号は一九四八年一月二十五日発行された。B五判の活版刷り、裏表紙とも十二ページである。表紙の「宮古文化」は左横組で赤の木版刷りである。下絵は我如古恵寛、彫刻は平良精一、表紙の印刷も我如古である。最終ページには、編集兼発行人・本村武史、印刷人・下地義一、発行所・宮古文化連盟本部、印刷所・宮古タイムス印刷部、定価五円、毎月一日発行、と明示されている。

創刊号には目次はなく、巻頭文は表紙裏から始まり、「宮古知事」の名で「宮古文化連盟の誕生を祝す」をのせている。過去の軍国日本の否定的面を明らかにし、連合国によって敗戦日本に課された「ポツダム宣言」の精神にふれた上で、「種々の活動は文化を伴うてこそ真に健全なものとなり、又限りない発展の歩みを続け得るのであり、そうでない人間活動は跋行的一時的なものとして消滅するのであります。それ故健全文化の創造建設こそむしろ新宮古の大きな宿題であり、解決を要する焦眉の問題でなくてはなりません。文化連盟の誕生こそ真に砂漠のオアシス、暗夜の灯台とも言うべきものであります。どうぞ本連盟が時代の大きな使命を担い、宮古に対する大きな責任をもたれ、真に人間生活の底力となり、宮古再建の支柱ならず、基盤となるよう願って止みません」と記している。

これにつづいて弁護士の下地敏之が「文化即生活への努力」と題して同じく祝辞を寄せ、二ページには、饒平名浩太郎が「宮古の古代文化」(一)を載せているのに、なぜか未完のまま二号以降にも掲載されずに終っている。三ページ以下には「政治について」大山定一、「第一回レコードコンサートを聞いて」TG生、「随感」牧一、小説「裸体画」小南敬介、詩「丘にて」向子、「岩柴に」雪陽梠、短歌「いくさの息吹き」五首・田崎邦男、俳句「新年雑詠」

三句・平本魯秋とつづき、最終ページには「宮古文化連盟」結成経過、同賛助員、寄附者芳名等が掲載されている。「政治について」は他誌からの転載のようだし、同様ニュース解説様のが他にもみられる。

着実に定期刊行を堅持してきた『文芸旬刊』を継承し、宮古民政府が鳴り物入りで発足させた文化連盟による創刊号にしては、量質ともにきわめて低調というほかない。編集後記では「大きく宮古の文化を反映させると同時に文化建設へ先んじ、また読物の少ない一般への精神の糧としての使命を果たして行きたい」としつつも、矢張り気になるのであろう、「頁数は僅少であるが将来の発展拡充を期して御愛読下さる様御願する」と記している。

3、文化史編さん委員会も発足

毎月一日発行、つまりは月刊誌を標榜しての出発であったが、二月、三月は発行せず、第一巻第二号は四月号として同月一日付で、しかも『文化』と改題しての発行である。奥付によると、発行人も稲村賢敷にかわり、編集人だけはそのまま本村武史で、印刷人も富永裕夫、印刷所は日南印刷商会に変わっている。定価もいきなり十円に倍増している。編集後記は「印刷其他の条件が旨くゆかず二、三月休刊するの止むなきに至ったことをおわびする」と言っているだけで、肝心の改題、定価の引上げ等については何ら言及していない。早くも前途の困難さを予測させるものがうかがえよう。

分量の方は二か月休刊のせいもあろうか、十五ページにふくらんでいる。巻頭三段組のうち上二段は「文化功労者追悼会」、下段は雪陽梠の十二行詩「街」を載せている。追悼会は前年十二月二十七日宮古民政府主催で、郷土研究の先駆者で故人となった伊波普猷、富盛寛卓、慶世村恒任ら三人を追悼して開かれたものである。文化連盟会員七十余名、遺族二十余名が出席した。追悼会ではひきつづき文化史編さん委員の平良彦一「宮古民謡に就いて」、同稲村賢敷「上比屋山の遺跡に就いて」を発表しており、同追悼会が宮古文化史編さんともかかわりのあることを垣間みせている。宮古民政府は一九四七年十一月二十九日宮古文化連盟を設立させた翌三十日には宮古文化史編さん委員会を発足させ、宮古の所謂「文化立島」について並々ならぬ決意のほどを内外に示していたからである。ちなみに編さん委員会は八人で構成、唯一人の専任委員に稲村が嘱託され、他は非常勤で平良彦一、友利明令、与儀達敏、山内朝保、饒平名浩太郎、島尻勝太郎、平良好児の七人が委嘱されていた。祭事、文献、土俗、歌謡など各分野を分担、多良間、大神などすべての離島をふくむ宮古全域の調査計画をすすめていたのである。

追悼会での稲村の研究発表内容は、同二号と三号に分割掲載されている。その他の二号掲載作品は、随筆「妄想の問題」牧一、小説「人のよい女房」藤川耕作、俳句「監房抄」三句・平本魯秋、短歌「信濃」十一首・田崎邦男、詩「貝殻の夢」克山滋、「小春日」向子、投稿コント「町子」KT生、多分編集部員が執筆したであろう「点心」二点（マクラム通り、都市的風貌）、「学芸会観覧記」、転載とおぼしい「時の話題」「世相寸描」等がある。

三号もまた五月ではなく一か月遅れの六月一日付で、五・六月合併号として発行された。今号からはじめて巻頭二段組下段に目

次があらわれている。上段は克山滋の「五月の夜」と「春の声」と題する各七行詩が併列して掲載されている。以下目次順にひろうと「上比屋山の遺跡に就いて」稲村賢敷、俳句「若夏」平本魯秋、詩「訪いて」芝木冬二、「女性の立場から」、「宗教の自由」友利栄吉、「トクセイとその楽団」友利秀一、「点心」、「時の話題」、小説「或日」楽波一平、小説「予感」三原憲作、詩「日向葵」一木ひろ、とつづいている。「女性の立場から」では、友利愛子、大山キク、本村ヨシ、与那覇良子らが女性の職場進出について述べ、「点心」は、図書館、市場風景の小ルポである。

通巻四号は順調に七月号として「芸術祭特集」と銘うち同月一日付で発行している。巻頭上段は芝木冬二の詩「或る郷愁」でかざり、下段は目次である。芸術祭は文化連盟初の催しで、同年六月十日から三日間、舞台発表が前進座、美術展が慈善病院二階で開かれている。特集内容は具志堅宗精宮古知事の「芸術祭にのぞみて」のほか、天久恵秀、金城英浩、平良彦一の三人が感想を記している。ほかには「宮古に伝わっている星の知識について」砂川博一、「言語の混乱と文化」平良恵盛、「音楽随感」豊見山恵永、「政治の在り方に就いて」藤村彪、「民主的ことば」作田普、詩「落葉」三木零子、「丘」一木ひろ、リレー小説「それから」藤川耕作らが執筆している。

第五号も八月号として順調に出ている。表紙絵について下地明増を表示しており巻頭詩は克山滋の「夏のアルバム」である。「女性解放の叫び—生活の科学化」真喜屋恵義、「人頭税の顛末」島尻勝太郎、「メチルアルコールの中毒とその恐怖」兼島清、「台風を語る」宮坂達巳、詩「ヒュッテの夜」雪陽梠、「旅情しきりに」芝木冬二、「沈黙の夜に」秋山向子、リレー小説「それから」第二回・冨永裕夫、コント「弟」小島伸太郎ら。編集後記では『女性文苑』創刊に祝意を表明、八重山の詩人・大浜信光を囲んで語る会〃ポエトクラブ〃のあったことを紹介している。

4、「巻頭言」登場

第六号は一ヶ月遅れて、十月号として同月一日に出ている。四ページ増の十九ページである。創刊以来初めて山内朝隆による「巻頭言」も登場した。しかし編集後記では、文化連盟の生みの親であり、その事務局をあずかる副委員長でもあった社会課長の山内朝隆が宮古南静園庶務課長に転じ、編集人本村武史も一身上の都合で辞任したことを伝えるとともに「一朝にして中枢を失い一大打撃である」と記している。新編集人平良恵仁記である。定価も十五円に引上げられている。山内の記す初の「巻頭言」は全文つぎのとおりである。

巻頭言　四十日四十夜荒量の断食の後、イエス・キリストに対する最初の試みは「是等の石を変じてパンとせよ」との悪魔の囁きであった。

此の囁きは二千年前と同じように今我々一人々々にのぞんでいる。筍生活もそろそろ底をつき、男は職場を商店に偽装し女は最后の一線上まで追いつめられ、こうして滔々たる風潮は周りの総てをパンにかえずんばやまざる勢である。パンは絶対優先の叫びはたゞさえ物質至上の伝統に拍車をかけ、政治も生活も低級な唯物論に輪廻する。

此の時に当り、我等は「生活至上」「文化優先」の旗幟ひる

がえす。我等は、自らの生命の中に肉と魂をみとめ、文化の名に於てその豊かな発展を見出さんとする。人間はパンの公平な配給のみで満足するものでなく、生命は文化の名に於て肉とパンの殻を破って成長する。

我等は今こそ「人の生くるはパンのみによらず」と宣言し、総てに先駆するものとして生命と文化を拝跪せんとするものである。

「巻頭言」につづいて他誌からの転載らしい賀川豊彦の「マルクスか？ラスキンか？」が掲載されているのも前号までにない変化である。以下「新教育の方向」福里文夫、「愛の火で殺せ泣く同胞を」南静園入園者S生、「父親となるの記」克山滋、「四季の宿」小南敬介、「心と、石と、秋の匂い」小南敬介、詩「いけま島の灯台」大浜信光、「街角」一木ひろ、「影像」牧一、リレー小説第三回「それから」三原憲作、そのほか「世相をのぞく」「話の泉」などがある。

第七号は順調に十一月一日十一月号として発行している。巻頭言は文化連盟委員長として発行人になっている稲村の署名が入っている。かつて平良の穀倉地帯であった七原など鏡原一帯が、戦時中軍用飛行場とされ、さらに空襲で穴だらけのまま戦後も放置されているのを如何にして耕地化するか、併せて生活用水の確保について提起している。以下、「政治と科学的精神」奥平朝一、小説「光に影の」芝木冬二、「結婚について」島康、「離婚について」奥平朝一、詩「秋」一木ひろ、短歌六首・南濤高、ほかに「世相をのぞく」など。六号同様の十九ページだが、芝木が宮古の文芸誌では初めて二十数枚にのぼる小説を一括発表しているほかは、全体として低調というか、粗雑な感がする。

もっとも巻末には「読者に告ぐ」を掲げ、「宮古文化発刊以来絶大なる御援助のもと着々とその歩みを進めて来た、本紙は発刊二年目を迎え愈々充実の期にはいりつつあると思います」と表明、そこで線香花火にならぬよう新年号をかざるために十二月号は休刊にして、新年号は「四〇頁という未曾有の冊子にする計画」なので、積極的に投稿してほしいとよびかけている。また編集後記では「先月号から月決め の読者を予約」していることも伝えている。

5、〃新聞人は政党と無縁たれ〃

こうして創刊二年め、通巻第八号として発行された一九四九年一月一日付新年号は三一ページ、大宜見朝晴の「冬」で表紙をかざっている。巻頭には、宮古軍政官ゲスリング大佐夫人の「クリスマスと新年のために」を掲げている。ついで新年号らしく平良彦一の「正月の思い出」、以下「妊娠の話」川平昌晃、「洋裁と文化」東浜節子、「無量寿限りなきいのち」岡本恵昌、座談会「楽屋裏よもやま話」名城政助、翁長小次郎、藤村彪、克山滋、司会・奥平朝一、「書店の窓から」松川恵典、コント「丑年」芝木冬二、「三吉の論理」牧一、「茶房ロン」KATUYAMA、「医者の立場から」開業医G・T、「新聞人への注文～新聞人は政党と無縁たれ」藤村彪、短歌「帰心」六首・田崎邦男、「秋も更けて」真弓明、詩「無弦琴」雪陽梠、「食料船」「飢饉」一木ひろ、「LONG・HERS」小室清夫、このほか編集部の話題つくりであろ

うか、「ハガキ回答」なるものを試みている。(一)宮古の新聞をどう思いますか、(二)このままで行けば餓死者は出るでしょうか、(三)宮古の芝居を御覧になりますか（御希望は？）、(四)貴方の奥さんはユタを信じていますか、(五)月何回位宴会があるでしょうか（家計への影響は？）、(六)碁はおやりになりますか、以上六項目である。回答を寄せているのは、下地敏之、友利克、下地恵栄、平良彦一、富永岩雄、瀬名波栄、稲村賢敷、山内朝二、石原雅太郎、盛島明秀、野津芳彦、下地盛寿、天久恵秀ら十三人。「世相をのぞく」とも関連して面白い。藤村の新聞評も動機はこれにあったのだろうか。

本号ではまたもことわりなしで平良恵仁が編集人をおり、発行人の稲村賢敷が兼任している。定価も一気に二十五円にアップしている。編集後記の「文学雑誌でなく総合雑誌として編集をやっていく積りです。政治、経済、文化の評論、詩、小説、戯曲の創造実践を通じてあらゆる面に向って、総ての人々に解る様に―皆の雑誌として出発致します」と、かかわりあるのであろう。

しかしまたも二月、三月と二か月休刊し、通巻第九号は四月一日付四月号として発行している。編集人も奥平朝一に変り、稲村の兼任ははずされている。もっとも「巻頭言」も巻頭論文「人頭税史話」も稲村が執筆している。今号では詩人・克山滋の不慮の事故死を伝え、遺稿「M君への手紙」（未完）とともに追悼文を本村武史と奥平朝一の二人が書いている。克山には戦後宮古で初めての単独詩集でもある「詩集・白い手袋」がある。九号にはほかに「妊娠の話」2川平昌晃、「女性と夢」宮島真保子、沢村秀子、砂川米、真壁克子、一木ひろ、「マコへの手紙の中から」進藤四郎、詩「別れ」「なげき」麻由美、「世相をのぞく」「御存知ですか？宮古風景→ア・ラ・モード」等がある。編集後記は、休刊について詫びた上で、「編集の不馴れは勿論ありますが、総合雑誌を発行する土地としても宮古は条件が相当悪い様です」と記している。どう条件が悪いのか、具体的には示していないので知りようもないが、読者の投稿も低調で、雑誌の売れ行きも思わしくないということであろうか。編集陣容の弱さ、それにともなって必然的に起きるのであろう企画等の弱さについての自省・自責の姿勢がそれほどうかがえないことからも、すべては相手の責任といった無責任な印象をうける。意識せずして雑誌の先行きの暗さを公表しているような編集後記ともいえる。

結局第十号は五月、六月、七月と三か月も休んだのち、八月一日付で発行された。初めて目次が表紙に掲載されたが、「言葉の魔術性」と題した巻頭言は無署名である。創刊号以来継続していた発行人・稲村賢敷の名も消え、前九号に初めて編集人として登場した奥平朝一の兼任となっている。定価も五円アップして三十円になっているが、これらの変化、改訂の理由は今回もまったく説明なしである。

「遊女史考―宮古花柳界の昔はどうだったでしょう？」饒平名浩太郎、短編二編「貞操」「盃」本村武史、克山滋遺稿「たばこのハナシ」、「新緑を呪う男」山下直樹、「国民気質様様」春野優、「社交ダンス」杉浦良平、ほか「回想閑話」安里積千代、「インタビュー刑務所」「化粧室」「世相をのぞく」など、いろいろ掲載されてはいるが、全体として三五ページという創刊以来の部厚さを埋めるために、あれこれ雑多に寄せ集めたとの印象が強い。

6、予告なく自然停刊

「文化立島」を標榜する宮古民政府の肝入りで設立された宮古文化連盟の総合文化誌『文化』もまた、何らの予告なしに第十号をもって自然停刊してしまった。「これから絶対に欠号などしないことをここに約束致します」（編集後記）と明記し、文化連盟本部は民政府内におかれていたのにもかかわらずである。一九四八年一月二十五日創刊から一九四九年八月一日まで、一年と七か月に十回発行して停刊したことになる。『文芸旬刊』以来中心的な役割を果たしてきた本村武史の回想によれば、政争もからんでいるようだが、定かではない。あえていえば民政府内部にあってもっとも理解ある山内朝隆社会課長がハンセン病療養所宮古南静園に転出したことが、つまづきの始まりといった感がする。時期を同じくして本村武史も編集人を退いている。さらにその後任の平良恵仁もおり、九号までには創刊以来の発行人稲村賢敷もおりている。短絡的にいえば民政府内の庇護を失い、さらに宮古郡教育界はもとより知識層のトップともいえる看板を失って、雑誌『文化』はもとより文化連盟そのものが崩壊してしまった、ということになるのだろうか。

公立高校長を最後に定職のなかった稲村賢敷（一八九四～一九七八）は文化史編さん委員会もいつか消滅してしまったために、郷土研究社を興してガリ版刷り雑誌『郷土研究』を創刊する。四～五号まで発行されたようだが、現在のところ二号、三号の二点しか確認されていない。当時の稲村にとっては雑誌の売り上げのみが唯一の収入であったと伝えられている。また、本村武史（一九一五～六八）、平良恵仁は新里博一、平良賀計らと宮古文芸社を設立、ガリ版刷りの『文芸』を一九五〇年三月創刊したが一号で終っている。そうしたなかでも俳句会、短歌会を定期的に催し、作品は地元新聞に発表するなど、とくに本村の生涯は教職のかたわらとはいえ、文学活動に終始したといっても過言ではないだろう。

さらに敬虔なクリスチャンであった山内朝隆（一九一〇～五五）は、宮古南静園庶務課長としての戦後の施設不備・あらゆる物不足のころ、入園者の療養生活改善を最優先に尽力するかたわら、キリスト教の布教に従事していたが、過労がたたって在任中喀血してたおれ、四年後その短い生涯をとじている。

四、創刊号だけの『文芸』

戦後宮古で三番めに発行された文芸誌『宮古文化』が、一九四九（昭和二十四）年八月一日、第十号をもって停刊してから半年余、翌一九五〇年三月十五日、『文芸』が創刊された。ガリ版刷りB五判、三九頁、定価二〇円である。奥付には「宮古文芸社」発行を示しているが、編集発行人には、本村武史、平良恵仁、新里博一の三人が連記されている。これは宮古文化連盟機関誌『宮古文化』（二号以降『文化』）創刊号に「編集兼発行人　本村武史」と記す一方で「本誌編集部員　本村武史・平良恵仁・新里博一」と三名連記していたことを想起させるものである。『文化』停刊ののち、元々同誌創刊に関わった三人がその後とも文芸誌発行に向けて志を同じくしつづけていたことを示すものであろう。表紙

裏二段組みの上段に本村武史が次のように「巻頭言」を記している。

私達は雑誌「文芸」を発行することになった。

文学を愛する人たちのパッションの現われだと言ってよいと思う。それについて一般の方々から同人だけの発表機関にしないようにとの御注意を度々受けた。私たちは未だ微力であり研究途上である。毛頭そんなことは考えていない。むしろ出来得る限り広範囲に発表の機会を開放して、そして一年に只の一つでもよいから真実に宮古の自然を、現実を、時代を、宮古人を象徴する作品が現われることを念願している。

先に沖縄の月刊タイムスが募集した沖縄戦記ものの作品を読んで、沖縄での文芸への理解とその歩みの真面目さに感動した。宮古にも文芸誌の一つもないのは淋しかったが、これで純然たる文学雑誌が生まれた事は嬉しい。

私達は文学的先輩は勿論、御理解あるインテリー層の方々の並々ならぬ御激励と御協力を得て、この雑誌を創刊する事を得た。守り育て、文学の一翼に貢献し得れば幸である。(武史記)

巻末に編集後記に代るものであろう「T・M」のイニシャルで記された「編集人の言葉」も本村武史と思われる。同人名についてはどこにも明記されていないが、巻頭言の下の欄に目次がでており、これによって三人以外の顔ぶれの幾たりかを知ることができる(註・目次に欠落しているのは本文に拾い、( )で補った)。

創作　刺身　牧　一　一頁
創作　濁流　宮島昌人　五頁
(酒中先生行状記〜あきつの一件　藤川耕作　十五頁)
俳句(年の暮)　国仲穂水　十七頁
戦前の文芸史　平良好児　十八頁
克山滋の追憶〜大見謝恒全の一周忌にあたり〜　平良賀計　二十頁
俳句(春)　下地恵栄　二十一頁
詩(部屋)　本村武史　二十二頁
(しずかなるおもい)　一木ひろ　二十二頁
創作　去りゆく人　本村武史　二十三頁
創作　捨てられし生命　小南敬介　三十二頁

執筆者のなかで、実名もしくは周知のペンネームで登場しているのは、藤川耕作(下地玄省)、国仲穂水、平良好児、平良賀計、下地恵栄、本村武史、一木ひろ(与那覇マチ子)、小南敬介(平良恵仁)の八人。未確認は牧一と宮島昌人の二人である。このなかのどちらかが新里博一であろうか。「奥付」以外で新里の名が明記されているのは、「原稿募集」をよびかけた欄の送り先として、本村武史、平良恵仁、平良賀計、新里博一の順で四人連記されている欄のみである。ともあれ「文芸」はこれら十人以上の同人に加えて、「文学的先輩」や「御理解あるインテリー層の方々」の「激励」と「協力」で日の目をみたのである。巻末には創刊を祝す広告も一頁取られていて、宮古民政府、宮古民政府議会、平良市役所、〈三工業所、スマイル薬店、宮古女子高等学校、嵩原歯科医院の七件でている。この時期、平良恵仁、新里博一の二人は宮古民政府、本村武史は宮古女子高等学校に勤務しており、

『文芸』の創刊は職場の上司・同僚からも歓迎されていることを示しているようである。それはまた文芸活動への協賛はもとより、「同人だけの発表機関にしない」という編集方針への共感でもあったろう。

それでは同人たちは宮古で文芸することについてどう考えていたのであろうか。「編集人の言葉」は「すべて偉大なる文芸作品は生活の中から生まれている。生活なくして文学は成立しない。自己の生活を深く知り、その中で悶え、喰いさがり、省ることによって作者の魂が「ウム」とうめき声をあげる、そのうめき声こそ文学である」と信じたい。しかし宮古は「いささか狭い。生活そのものを作品化することは余りに〝生〟であり過ぎ、芸術的ヴィジョンの生まれる余地がない」、よって「浪漫的作品もまた或る意味に於いて宮古を象徴する芸術と言える」と記している。これは前述したように「T・M」署名ではあるが、同人共通の認識であったろう。同人ばかりでなく読者にも開放されていることを示す「原稿募集」には、「小説、評論、随筆、詩、短歌、俳句、其の他文芸もの」で、「原稿用紙四百字詰十五枚内外　筆名可なるも住所氏名明記の事」と記している。「賞金　本誌発表の分は薄謝を呈す」とまである。さらに締め切りは「毎月十五日」と明記しており、『文芸』は月刊を企図して創刊されていることを明示している。

このように宮古の文芸状況について同人なりに分析し、事実上の続刊を公表していたが、結局『文芸』は『文化創造』や『旬刊文芸』『文化』の先行三誌よりもみじかく、創刊号を出しただけで、停刊したようである。しかも三人の編集発行人のうち、このちとも宮古にあって文芸活動を続けるのは本村武史ひとりで、平良恵仁、新里博一の二人は一九五二年四月「琉球政府」発足後は那覇へ転出しているが、創作活動の場には見当たらない。開業医の平良賀計は、その後上京して研修生活に入り、帰県後は那覇で開業の傍ら句作に精進している。

五、本村武史の時代小説素描

戦後宮古の文芸活動を語る上で、欠かすことのできない担い手の一人に本村武史（一九一九～一九六八）がいることは、これまでにもいろいろなところで語ってきたし、書いてもきた。彼の本業は高校の国語教師である。生活の本拠をそこにすえ、子弟の教育にたずさわる傍ら、文芸運動の推進者であり、創作者としても多くの作品を残している。詩、小説、評論、エッセイと多岐にわたっているが、確認できる十六編の小説は主として短編である。そのなかで宮古史に題材をとった、いわば時代小説とよべるものが四編ある。発表順にあげると「落書斬罪」「夜光の玉」「戦国仇討図絵」「てんま船異聞」である。

「落書斬罪」は宮古文芸同人の同人誌『宮古文学』（『あざみ』改め）三号に発表されたもので、原稿用紙十一枚の短編である。標題が示すように、宮古の近世において唯一死刑に発展した、いわゆる「落書（ざん書）事件」を扱ったものである。

落書（ざん書）は二回起きた。はじめは一八五八年首里王府派遣検見役武富親雲上が宮古に在職のとき、その宿舎に、ついで二回めは二年後の一八六〇年薩摩商人に託して在那覇薩摩藩在番奉

行にあてたものである。初めのは犯人不明のままうやむやとなり、後のは途中で発覚、首里王府への重大な反逆事件として、王府役人の摘発するところとなる。落書の要旨は、琉球は小国で財政は窮乏し、庶民は生活苦にあえぎ、大国につくことを望んでいる。宮古は元々用語、先祖の由来ともに大和に近く、大和に帰属することをよろこばぬものはいない。悪政に苦しむ庶民を救済してほしい。さすれば人びとは大和に服すであろう（慶世村恒任『宮古史伝』）、というものである。

本村は冒頭に、犯人として検挙された前島尻与人・波平仁也恵教の審理経過を踏まえて断を下す場面から書き起こしている。ついで事件の内容に入って、逮捕時の恵教一家の悪びれぬ別離の宴のもようを愛情深く描出した上で、再び審理状況を展開させ、最後に一九六三年二月パイナガマでの処刑で結んでいる。

その間に、幕末尊皇攘夷、佐幕開港で大揺れにゆれる京都や江戸、薩摩の状況、さらにはアメリカの南北戦争まで手ぎわよくちりばめている。適度の省略とゆきとどいた筆運びは、美事に近世末期宮古を象徴する「落書事件」を過不足なく位置づけているようである。

「夜光の玉」は、宮国泰良の主宰する雑誌『週刊宮古』に一九六一年十月二十九日付一七号から十一月二十六日付二一号までの五回連載で、ほゞ三五枚である。

メリマ按司と天女との子、真種子若按司の継承する宝珠を、カナマ按司の娘モリマラが強奪しようとしたが果たせず、宝珠は若按司の遺言で川満大殿の手に渡る。大殿からさらに仲宗根豊見親の手をへて中山王尚真へ献上された、とする「御嶽由来記」（一七〇五～〇七年）の記す喜佐真御嶽縁起が素材となっている。

「御嶽由来記」からはモリマラが宝珠を欲しがった動機を知ることはできないが、本村は小説というイマジネーションの世界で、宝珠が神につかえ予言者としての霊力を持つ大司の地位を保障するものだと位置づけ、若按司の母天女を大司としている。大司の死後、モリマラは生前の大司との約束を楯に宝珠をよこせとせまる。邪心を持つものには渡せないと拒否した若按司は、モリマラ主従の拷問で息も絶えだえとなる。救出に当った川満大殿に若按司は「私ははっきり分かりました。夜光の玉は、それを持つべき人が持ってこそ、霊力を発揮するものだと。それを持つのにふさわしくない人間の前には、逆に不幸な運命の数々をまき起こすのだと、夢幻の中で考えていました。夜光の玉はそれを持つにふさわしい人の前では、光を発します。私の家の床柱の中に隠してありますから、取り出して、川満大殿、あなたが思う通り処置して下さい」と言って、息を引きとる。

鬼女に扮したモリマラ主従十数人が、徹宵して家探ししてもみつからなかった宝珠は、川満大殿が行ってみると、「荒れ果てた家の中央にある床柱が、大殿を迎えるが如く、サン然と光り輝いていた」と記すことで、この短編を結んでいる。

宝珠は宝剣「治金丸」とともに仲宗根豊見親から尚真王に献上されたことは、首里城外の「国王頌徳碑」によって広く知られているとおりである。同碑は冒頭に「みやこよりち金丸ミこし、ミ玉のわたり申候時にたて申候ひのもん」と刻しており、「大明嘉靖元年壬午十二月吉日」とある。一五二二年である。支配者間に

おける剣の献上は権力委譲ー服属を意味するとも解されるようで、宮古の支配者仲宗根豊見親が中山服属を誓うに当って、宝珠も相応の役割をはたしたことになろう。

小邑メリマ＝真種子若按司→下地地方＝川満大殿→全宮古＝仲宗根豊見親→中山（琉球）王＝尚真へと献上される宝珠の運命を予見させることで、支配者の論理を垣間みせている。わずかしか残存しない記録に依拠しながら、なおその記録のすべてを引き写さないことで、かえって読者にせまってくるものがあるように読みとれる。

「戦国仇討図絵」は、一九六一年から翌年六二年にかけて宮古教職員会機関紙『宮古教育時報』に連載された長編時代小説である。掲載紙のすべてが保存されていないためにその内容はもとより連載回数や分量も明らかにできないのは、まことに惜しい。たゞ残存する二、三の掲載紙を通じて、およその見当をつけられるていどである。

現在確認できるのは一九六一年二月三日付の「第二話／狩俣城の巻／43」から五日付44、七日付45、十一日付47、十三日付48の五回分のみ。平良市（現宮古島市）北部保里にあったと伝えられる糸数城の糸数大按司を中心に、狩俣の小真良波按司、それに女妖術使いらが糸数城やポー崎、漲水の浜などを舞台に登場している。おもに「宮古島記事仕次」（一九四八年）に依拠していることがわかる。しかし前後の掲載紙が確認できないので、第一話がどんな題で、いつからいつまで何回掲載されたのか、また第二話がいつまでつづき、第三話以降もあったのかなど、目下のところ不明とするしかない。たゞ『宮古教育時報』は当時隔日発行であり、休載がなかったとするなら、第二話は前年の十一月上旬ごろから始まったとみることができよう。一回分は平均して三枚半、現段階での最終確認回数四十八回分だけでもおよそ一六八枚であり、本村の手がけた時代小説四編のうちでは筆頭をかざる長編といえそうである。

「てんま船異聞」は、野平恒主宰の雑誌『週刊春秋』に一九六四年十二月十三日付一七号から翌六五年九月二十六日付五一号まで、二十七回にわたって連載された。毎回八枚ていどで、およそ二百余枚に及ぶ長編である。

一三九〇（洪武二十三）年中山（＝琉球）に朝貢したと伝えられる与那覇勢頭豊見親に材をとり、いわゆる与那覇原軍（イウサ）を展開している。宮古史に多少とも関心をよせるものにとって、与那覇原軍はひとしく大いに興味と関心をそそられる世界である。たゞし何一つ当時の記録はなく、すべては後代に整理された記録と歌謡、口碑によってうかがい知るのみである。与那覇原の一族といわれ、のちに家譜整備にさいして白川氏の祖と称される与那覇勢頭豊見親についても不確かであるばかりか、近年は与那覇原軍そのものの存在さえ疑う研究者も出ている。

ともあれ「御嶽由来記」や「白川氏正統系図家譜」（一七五四年）はじめ「球陽」（一七四三～四五年）等に与那覇勢頭豊見親が「大明洪武二十三年始入貢中山…」と記され、その経緯も略述されているが、与那覇原軍については他に宮古島記事仕次（一七四八年）に比較的詳細に記されている。これら後代の、しかも限

られた資料によって、多くの研究者が与那覇原軍の解明、あるいは与那覇勢頭豊見親の人物像にせまるさまざまな試みをかさねている。

当然のことながら、不鮮明なその人物像について、文学にたずさわる側からの奔放なアプローチがあっても不思議ではない。本村武史、松下仁、皆川元らの試みがそれである。わけても本村は宮古の可能な限りの史料に眼をとおした上で、当時の琉球、日本本土、大陸沿岸の情勢をもにらみながら、与那覇勢頭豊見親と宮古の状況を展開している。

「てんま船異聞」は、船火事、夢、御船の親、出船、密使、妖計、めぐりあい、前の毛の決戦、与那覇勢頭、と九つの骨組みで構成されている。与那覇村の若い漁師インタラ、ジラーの兄弟が、海賊船に襲われ、瀕死の火傷を負いながら唯一人暗黒の海に脱出した男＝与那覇原一党の首領・佐多大人の郎党ヤマルーを救助したところから、物語は展開する。

ヤマルーは佐多大人の持船で中国との交易に従事していたこれまでの経緯を語り終えて息絶える。ヤマルーの最後をみとり、佐多大人に通報したことが縁となって、インタラは佐多大人の配下となり念願の四反帆船の船頭となる。佐多大人の配下を乗組員として大陸との交易に向う途中、遭遇した漂流船積載の武器をめぐって乗組員と衝突、弟ジラーは一人無人の漂流船に取り残されてしまう。漂流船から持ち帰ったさまざまな商品をみて、喜悦満面の佐多大人は、インタラを娘ウミタルの婿に請い、与那覇親方と呼ぶようになる。さらにインタラは自覚せずして、全宮古制覇を企図する佐多大人の密使となって内立按司のもとへ遣わされたりする。

二年後、再び大陸へ渡ったインタラは泉州で、死んだとばかり思っていた弟ジラーが、日本、中国、ルソンを股にかけて交易する豪商進堂太郎左衛門に助けられ、その配下となって元気に働いているのに再会する。戦乱つづきの宮古に帰る気のないジラーは、かつて宮古でユムヌ武佐（稲葉嶺の七人兄弟の一人）に襲われたとき、助けてくれた目黒盛に日本犬一頭を届けるよう託して、日本本土へ去っていく。

泉州で造船を学び、進貢船の帰途に便乗して宮古へ帰ったインタラは、ウミタルと結ばれて与那浜に落ちつき、新しい村立てを始める。与那浜はかつて佐多大人が高腰按司を襲って奪いとった肥沃な土地である。初めのうち、インタラ夫婦を与那覇原の一族として敬遠していた村人たちも、自ら鍬をふるって農耕にいそしみ、漁をする姿にいつか好意と敬意をもって接するようになる。一方目黒盛に一敗地にまみれた佐多大人は戦死し、かろうじて生き残った人びとはインタラ夫婦を頼って与那浜へ落ちのびてくる。

その後数ヵ月かけて七反帆船を造ったインタラの出船には、その壮途を祝して目黒盛はじめ宮古各地の按司が数々の引出物をもって見送りに来た。乗組員三十人とともに馬を積んで中山へ上ったインタラは、先年泉州からの帰途にさいして世話になった進貢船の具志堅親雲上や波平勢頭らと久しぶりの対面をし、その斡旋で中山王に閲見する。日本本土はもとより大陸沿岸諸国との交易で賑わう那覇での交易許可証を授けられて帰ったインタラこと与那覇勢頭を、人びとは「与那覇勢頭豊見親」と尊称した、と

いうふうに展開していくのである。

佐多大人と与那覇勢頭豊見親の関係については定かに伝わっていない。それ故親子説、庶子説、一族の若き部将説など、いろいろ考証されるなかで、本村は女婿説をとって、乱世を背景にしながらも明るい場面を描き出している。また、初の中山（琉球）上りにさいして何を持っていったかも伝わっていないが、太平馬として中国とも関わりをもつ宮古馬を登場させ、さらに具志堅親雲上らの示唆をうけて以後は宮古各地でいくらでも自生するトウガラシを粉末にして運ばせている。これならば輸送上も安全であったろう。代って帰途は鉄の農具や磁器類を持ち込み、人びとに分ち与えたとしている。

殺伐とした長い戦乱の世に男女の愛を登場させ、平和な生活を渇望させる。その縦糸に与那覇勢頭をすえ、宮古史上名を残した多くの人びとが横糸となって巧みに結びつけられている。その上で、「もし、政治的に村を治める者が必要ならば、私以外の村の衆の中から適当な人物を選んで治めてもらうがよい」と、人びとから豊見親と尊称される与那覇勢頭に語らせて結んでいる。本村のなかには薩摩支配で大国に翻弄される近世以降の、ついで第二次世界大戦での敗戦で米軍に全面占領されている沖縄（宮古）の現実を、与那覇原軍に重ね合わせることで、民衆のしあわせと平和を招来させようとの願いがあったのであろうか。

初め、佐多大人の股肱であり、竹馬の友であるカアラとモーシイ夫婦の愛娘であるウミタルは、佐多大人の息子樽金の許婚者として登場させながら、いつか佐多大人の娘で、インタラこと与那覇勢頭と夫婦になるという、いくつかの構成上のミス（？）が指摘されなくもないが、宮古史に題材をとってこれほど面白く読めた小説は他にない。

おわりに

本稿におさめた五つの小論のうち四点は一九八〇年代後半に、編集者の要請に応えてそのつど個別にまとめたものである。当初から全体像を設定して体系化したものではない。それゆえ互いに関連し合うばかりでなく、時期、登場人物など範雑に幅奏している。このように一つにまとめるからには改めて整合性に配慮し、体系的に整理すべきであろうと思わぬでもなかったが、前述のようにそれぞれは発表時期も異にした個々の小論ゆえ、あえて整理せず、ただ時系列におくことで多少とも理解しやすいようにした。併せて先にまとめた「戦後初期宮古の文芸活動～「文化立島」を目指した若ものたち～」（『宮古島文学』二号）に続くⅡとした。初出発表誌は次のとおり。

戦後初の雑誌『文化創造』『八重干瀬』八号　一九八八・三・二五
ガリ版刷り一枚の『文芸旬刊』『八重干瀬』九号　一九八八・一二・二〇
文化連盟と総合雑誌『宮古文化』『八重干瀬』一〇号　一九八九・一一・一五（原題は「民政府主唱で創刊した総合雑誌『宮古文化』」）
創刊号だけの『文芸』『宮古郷土史研究会会報』一二号　二〇〇一・一・一二
本村武史の時代小説素描　『八重干瀬』五号　一九八四・一一・一五

（なかそね・まさじ）